優秀賞

心温まる瞬間

北海道　北海道教育大学附属函館中学校　三年
中尾　名歩

『港まつり』の初日、花火大会終了後のことです。駅はお祭りから帰る人であふれかえり、電車も当然のようにすし詰め状態でした。私の住む地域では、電車が満員になることはめずらしく、この状況に慣れていない人が多かったのではないかと思います。

新鮮な光景に戸惑(とまど)いながらも、みんな最大限に身を縮め、駅員さんの張り上げる声に合わせて少しずつ詰めていきました。まったく身動きの取れない状態でしたが、お祭りの余韻(よいん)もあったのか、電車は明るい雰囲気で走り出しました。

するとその瞬間、熱気や圧迫感に恐怖を抱いたのか、赤ちゃんが突然泣き出しました。必死にあやしながら頭を下げる母親に、周囲の人々はこう声をかけていました。

「気にしないでください！」

「赤ちゃんは泣くのが仕事だからな。」

「どこで降りるんですか？」

これらのひと声は、母親に対する思いやりと、親子が安全に下車するための配慮にあふれていました。たまたま近くに居合わせていた人の小さな気づかいや思いやりを、ほかの乗客たちも微笑(ほほえ)ましそうに見守っていました。私もあの場にいられたことが、ただ嬉しかったです。

昨年、学校帰りのバスの中で、幼い子が泣きだしてしまったことがありました。車内に響き渡る泣き声に、困った顔で目配(めくば)せをしている人もいました。幼い子の母親は、多方向に頭を下げ、肩をすぼめながら降りていきましたが、今回の電車でのできごとのように周囲がひと声かけるだけで、あの殺気だった緊張感の漂う雰囲気を少しでも和らげることができたのではないか、と思います。

私たちは約 3 年間、新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受け、人とのつながりの希薄さや距離感の変化を感じる日々を過ごしてきました。この経験から、自分が何らかの行動を起こすということに対して、無意識に迷いや抵抗が生まれてしまう瞬間が増えてしまっていたと思います。しかし、お祭り後の電車でのできごとでは、人々の思いやりや気づかいが示される場面を目撃し、その抵抗が少しずつ和らいできていると感じました。

小さな親切から生まれる心温まる瞬間こそが、私たちの日々をより彩りのあるものにしていくのだと思います。

少しずつ解放的になりつつある今、周囲の親切な行動に目を向け、自分自身もその輪に加わることで、思いやりに満ちた日常を築いていきたいです。